

中国空軍ニュース：J-20 ステルス機の試験飛行の進展

漢和防務評論 20150805 (抄訳)

阿部信行

(記者コメント)

2010 年に中国空軍ステルス機 J-20 の存在が明らかになってから、その後は断片的な報道しかありません。

現在は初期の実証機から発展した機体が中国空軍の認証を得て 4 機の原型機をもって試験飛行が行われているようです。中国空軍は J-20 の飛行試験を急がせているようです。ネックはやはりエンジンとレーダーか？

同時期にロシアでステルス機 T-50 の開発が進行中で、インドにおいてもロシアと共同開発によりステルス機 FGFA が開発中ということで、J-20 には中国の面子がかかっていると言えるでしょう。

KDR 香港特電：成都航空機会社第 132 工場は、2014 年に新たに 5 個の格納庫を建設した。この動きは J-10B の増産のためと KDR は考えていたが、中国航空工業界の消息筋は、J-20 の生産に関連し最近次のように述べた：これらの格納庫は J-20 用に設計されたもので内部の規格が J-10 用とは少し異なる。現在主に格納されているのは試験飛行中の J-20 である。4 機の J-20 が同時に試験飛行を行っている。試験の方法は、J-10A 当時と同様である。空軍は試験飛行期間の短縮を求めている。2017 年には全ての試験が完了する。2017 乃至 2018 年から小規模の実験的な生産が始まる、と。同時に試験飛行を行っている 4 機の原型機の機番号は、2011、2012、2013、2015 である。2010-2011 年には 2 機の技術実証機が出現した。このことは、2011 年から試験が開始されたこれらの機体は定型後の原型機であることを意味する。

2013 年に出現した 2011 号機のインテークダクトの外形は一部改修されて、大型化した。またエンジンは大推力の AL-31F-S3 に換装されている可能性がある。垂直尾翼、主翼等もかなり改修されていた。EOTS (ELECTRO-OPTICAL TARGETING SYSTEM、光電目標定位系統) が取付けられ、対地攻撃能力が強化されている。注意すべきことは、2012 号機から 2015 号機まではエアロダイナミックスの変化は大きくないことだ。2011 号機と比べると、後の 3 機 (2012 - 2015 号機) のインテークダクトは再び変更されている。2013 号機にはピトー管がない。2015 号機には伸縮式の空中給油プローブが取付けられている。2012 から 2015 号機のエアロダイナミックスは基本的に大きな変化はなく、尾翼が一部改修されているのみ。このことは中国空軍が J-20 の現在の設計を受け入れたことを意味する。

このほか、この 3 機の J-20 原型機が 2014 年に試験飛行を開始したことから、試験飛行の実施速度が加速していることが分かる。現在、成都では J-20 が集中して試

験飛行を実施しているようには見受けられない。格納庫内に J-20 が 2 機駐機しているようだ。この機体の機番号は 2013 と 2015 の可能性がある。その他の原型機は、閻良（西安郊外にある中国空軍飛行試験センター）に移動しているようだ。このように状況分析すると、閻良の 2 機の原型機はレーダーを取付け、武器、レーダー、アビオニクス、フライトコントロールシステムの試験を行っている可能性がある。すなわち 2011 号機及び 2012 号機で行っているはずだ。後の 3 機（2012-2015 号機）の原型機は、同じエンジンを取付けている。このことから小規模生産に入った後も、同じエンジンを使用することが考えられる。次の段階では大推力エンジンに換装後、外形がまた変更される可能性は否定できない。

基本的に肯定できることは、J-20 が確かに AESA レーダー（アクティブ・フェーズド・アレイ・レーダー）を取付けたことだ。J-20 に取付ける前に、TU-204 号試験機上で 3 年以上にわたって試験を行ってきた。中国は 2004 年に AESA レーダー開発を事業化した、12 年も経ってから空中試験に入るのは中国空軍にすれば異常ではない。

ロシアの T-50 と比べると、J-20 の試験飛行のスピードは極めて速い。T-50 は、2013 年末までに 5 機の原型機を製作した。2014 年 3 月から第 929 国家試験飛行センター（中国の閻良に相当）でテスト及び試験飛行が開始された。今後試験飛行に 2 年間は必要で、2016 年に小規模生産に入る予定である。

これらのことから、J-20 の今後のテストは、順調に行けば、約 2 年必要だろう。小規模生産の開始時期は T-50 と数ヶ月しか変わらないことになる。ロシアの T-50 の試験飛行及び技術に関しては、J-20 に比べればはるかに透明性があり、多くが公開されている。アビオニクス、レーダー、エンジンは、モスクワ航空ショーで展示されている。J-20 は神秘のベールに包まれたままである。現在明らかになっているのは、弾倉内に R-77 に似た中距離空対空ミサイルが見受けられたのみである。このミサイルは PL-12 の改修版である可能性がある。弾倉内に入るように大きな安定翼を改修したようだ。

2015-2016 年にかけて成都では更に多くの原型機が生産される可能性がある。2011-2015 号機に計画された試験飛行を、増えた原型機に試験項目を分担すれば試験飛行の期間を短縮することが出来る。

2017-2018 年に、中国空軍は J-20 に換装する可能性がある。最初に換装する部隊は、通常滄州の飛行試験センターである。現在、この部隊は J-10、SU-30MKK 等を保有している。したがって主要な最新型航空機は必ずこの部隊に配分され、機種転換訓練が行われるようだ。実戦部隊はどの部隊が最初か？現在は予想できないが、常識から判断して、J-20 が多用途戦闘機であることから、SU-30MKK 及び J-10B と同じであろう。KDR が大胆に予測すると、換装の順番は現在 J-8II シリーズを装備する優秀部隊の中から選抜される可能性がある。J-20 の価格は相当高いので、年間生産機数は J-10、J-11/16 ほどではないと推測される。

以上